

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第799号 平成26年9月5日

## 大いなる沈黙へ

「大いなる沈黙へ」

これは、現在シアター・キノで上映されている映画の題名です。

この映画は、フランスのアルプス山脈に建つグランド・シャルトールズという男子修道院の日常生活

を描いたドキュメンタリーです。ドキュメンタリーは数多くありますが、この映画は、効果を高めるための音楽はもとよりナレーションも全くない、文字通り沈黙の世界を、そのまま切り取って映像化しています。



「大いなる沈黙へ」の中から、映像の一部



フェルメールの「牛乳を注ぐ女」

グランド・シャルトールズ修道院は、カトリック修道院の中でも取り分け厳格な戒律で知られており、修道士達は、ひたすら祈りと労働の日々を重ねています。

非常に質素で、かつ、全く自由がないように見える修道士達の日常ですが、中でも厳しいと感じるのは、修道士同士の会話が許されているのは、昼食後の散歩の時間だけという沈黙の世界に身を置いている事です。

映画の中では、修道士達が外で雪遊びに興じるシーンが出て来ますが、それ以外の時間は、ミサでの祈りの声以外には、衣擦れの音、人が歩く靴音、ドアの開け閉めの音、そして鳥のさえずり位のものです。

映像全体は、まるで墨絵のようですが、窓から差しこむ光が唯一、その世界に色彩と生気を与えています。映画の1シーン、1シーンは、まるで光の魔術師といわれたフェルメールの絵のように私には感じられます。

「大いなる沈黙へ」の監督は、西ドイツ出身のフィリップ・グレーニング氏で、グランド・シャルトールズ修道院の映像化を試みたのは1984年と、今から30年も前の事になります。しかしその当時、修道院側では今はまだ早過ぎると映画化の許可を与えなかったそうで、修道院から映画化の許可が出たのは16年後の2000年の事です。しかも、映画化に当たって修道院から示された条件は、音楽なし、

ナレーションなし、照明なし、しかも、中に入れるのは監督一人という大変厳しいものでした。

このため、グレーニング監督は、修道院の一員として、6か月間にわたり、他の修道士と同じように独房で生活し、務めを果たし、更にカメラを回すという生活をします。彼は、この時の事を「それはまさに、静寂を探究する旅だった（「大いなる沈黙へ」プログラムから）」と述べていますが、映像を通じて、その事はひしひしと伝わって来ます。

映画が完成したのは2005年ですが、その後この映画はヨーロッパ各地で静かな反響を呼び起こし、9年の歳月を経てようやく日本にやってきました。

シアター・キノの中島洋支配人から、「この映画はヒットすると思う」と聞いていましたが、正直半信半疑でした。しかし、映画館に入ってみると、客席はほぼ一杯で、関心の高さを感じました。

中島支配人に、音楽も、ナレーションもない、そんな映画を製作しようとした意図は何処にあったのだろうかと聞いたところ、そのような意図が見えるようであれば、この映画は失敗なのではないかとおっしゃっていました。つまり、映画を見た観客一人ひとりが、「自分の心の中で消化するしかない」のだという事だと思います。

私達が住む世界は、音に溢れ、沢山の言葉が交錯しています。私達は、日々そうした喧騒を楽しむかのように生活していますが、しかし同時に、その喧騒の中に「何か大事なものを置き忘れていないかという不安感」を引きずっている、というのが現代人の今の姿のように感じます。

「大いなる沈黙へ」という映画は、そうした喧騒の世界、現実社会とは相反する精神世界を描き出しています。人々がこの映画に関心を持つのは、自分が置き忘れて来たものにもう一度触れ、感じてみたいという思いからかも知れないと、映画を観終わった後で感じました。

この映画の最後に、盲目となった老修道士の語る場面が出て来ます。人が人に語って聞かせる唯一の場面です。

その中で、老修道士は、「今起こっている事は全て私達の幸せのため。私は、盲目になった事を神様に感謝している」と語ります。そして、死は何も怖くない、とその日が来ることを待ち望んでいるようにも見えます。

世を捨て、ひたすら静謐な世界に身を置き、死に向かって日を重ねる事にどのような意味があるのか、私のような俗人には到底理解出来ません。ただ、彼等の揺るぎのない姿を見ていると、沈黙の世界の中で私には聞こえない何かを聞き取り、私には見えない何かを見ているに違いないと強く感じます。

3時間近い大作ですが、沈黙を映像化したという点で、秀逸だと思います。

（塾頭：吉田 洋一）